

【ポスター発表】

保育士養成校学生健康における関連要因の検討 — 実際生活の視点から —

○ 和歌山信愛女子短期大学 渡辺 直人 (010023)

キーワード：生活観 健康観 パス解析

1. 研究目的

現代のわが国においては、鬱や適応障害等の精神疾患の患者が増加している。厚生労働省の資料「こころの病気の患者数の状況」（2018）では、気分障害、神経症性障害は毎年のように増加している。また「患者調査」（2017）においても、64歳までの精神障害者・児の数が、2002年と比較しても増加している。これら精神健康の問題は一部の課題ではなく社会的な課題であるというのは否定できないだろう。

そして保育職においても従事者の精神疾患は問題視されている。株式会社ウェルクスは、幼稚園・保育所・その他福祉業勤務者96名、主婦4名を対象にメンタルヘルスやストレスに関するアンケート調査を行った。その結果、5人に1人が鬱のような症状に見舞われた経験があったことが示された。この調査は属性の詳細が示されていないため、より検討が必要であろうが、保育職の課題が示唆された結果といえるのではないだろうか。保育士、保育職のよりよい支援が今後とも必要であり、そのためにも基礎資料の収集が必要であると考えます。

しかしながら先行研究は少ない。斎藤・平井（2021）は、保育士の精神健康に関する先行研究12編のレビューを行っている。斎藤・平井はこれら先行研究を概観し、今後の課題として精神健康の関連要因の検討を今後の課題として見出した。これらを踏まえ、保育職のよりよい労働環境を構築するためにも、本研究ではその関連要因の検討として、健康観とその構造を明らかにする。

なお、保育士・保育職は経験年数によってその内実は異なる。そのことから、本研究では保育職の経験年数を、10年以上を「ベテラン」、4年目から9年目を「中堅」、2から3年目を「若手」、0から1年目を「新人」、そして「保育士養成校学生」と5つに分割する。そして本報では「保育士養成校学生」を対象として健康観とその構造を検討する。

2. 研究の視点および方法

本調査は2021年11月に実施し、関西地方に所在するA保育士養成校1年生73名を対象とした。調査の方法として、調査協力に同意した73名を対象に、アンケート用紙を配布した。調査内容は心身の健康という点を考慮し、9項目を設定した。

(1)リズムのよい生活を送っている。(2)毎日同じ時間に寝て起きられる。(3)よく運動をす

る。(4) ご飯は毎日決まった時間に食べる。(5) 家事手伝いを積極的に行っている。(6) 最近、身体の調子はよい。(7) 毎日楽しく過ごすことができている。(8) 私は健康的だと思う。(9) 毎日元気だ。

(1)-(5)に関しては「生活観」として、よりよい生活が健康につながるということを考慮し設定した。また「健康観」として、(6)は身体面の主観的な健康、(8)は身体面の客観的な健康、(9)は心理面の状態的な健康、(7)は生活の総合的な満足度として設定した。分析はパス解析を行った。設定したモデルの適合度には適合度指標である χ^2 適合度検定(χ^2 値、自由度、p値)、SRMR、GFI、AGFI、CFI、RMSEAの6つを用いた。モデルは生活観各項目が健康観(6)、(8)、(9)に、そして(9)が(6)、(8)に、また(6)、(8)、(9)が生活の総合的な満足度(7)につながることを想定して作成した。分析には清水(2016)のExcelアドインツールであるHAD version 17.20を使用している。

3. 倫理的配慮

倫理的配慮として、日本社会福祉学会研究倫理規程を遵守し調査を実施した。個人情報 は厳密に管理し、外部に漏洩の防止を徹底すること、得られた情報の目的外利用はしないこと、回答は随意であること、また、対象者が学生であることから、本調査協力によって評価等には如何なる影響はなく、不利益を被ることはないことも告知している。

4. 研究結果

Cronbachの α 係数については十分な値が確認され、信頼のある結果となった($\alpha = .838$)。次にパス解析を行った。分析の結果、モデル適合度は概ね許容範囲の適合値となったが、AGFIは0.8を下回り、RMSEAは0.1に近い値が算出された($\chi^2(7)=11.196$, $p=.130$ 、SRMR=.047、GFI=.959、AGFI=.789、CFI=.983、RMSEA=.098)。この結果からも、モデルとしては示唆を得るものとなったが十分な結果ではなく、サンプル数や外生変数の数、質問内容等に関してさらなる検討の必要性が示された。

5. 考察

本調査は先行研究の斎藤・平井(2021)の課題を受け、健康における関連要因を生活という視点から追求した。分析の結果、モデルは一定の適合値が確認されたが充分とはいええず、外生変数等でさらなる検討の必要性が示された。より具体的な生活実態、一つ一つの具体的な行動にも踏み込み縦断的に調査を行っていくことが求められてくるだろう。

参考文献

齊藤 友子・平井 和明(2021). 保育者の精神健康およびその関連要因についてのレビュー. 日本社会福祉マネジメント学会誌, 1(2), 43-55.